NPO 法人岡崎がくどうの会

令和 3 年度岡崎市放課後児童クラブ支援員研修レポート

【日時】　2021 年（11）月（8）日（金）10 時～11 時 30 分
【会場】　岡崎市図書館交流プラザ･りぶら
【内容】　何らかの配慮･支援を必要とする「子どもたち」と「対応」
【講師】　武田正道さん（こども発達相談センター）

【クラブ】（　　たけのこクラブ　　）
【名　前】（　　岩井　里真　　）

本日の研修で心にのこったことや気づいたことや学んだこと、今後の実践に活かしていきたいことなど、感想もふくめてお書きください（自由記述）。

まず初めに今回、『何らかの配慮･支援を必要とする「子どもたち」と「対応」』という内容で講師の武田先生は主に“発達の偏り”による配慮や支援が必要な子どもへの理解と対応だったが、一方でこども育成課の方からの話の中にあったコロナ禍で生活する子ども達や災害を経験した子ども達の心の変化に対するケアも今回の“何らか”に含まれるのだと気づかされました。1 年前に比べて制限は緩くなってきていたり、この生活に慣れてきたりしているとは思いますがそれまでの生活とは違うコロナ禍の今、子ども達全員が何らかの窮屈さやもどかしさを抱えて生活している事を念頭に置いて、メンタルケアも含め保育にあたらなければいけないのだという事を改めて考える機会となりました。

武田先生の話にあった“黄金の１週間”についてのお話には身に染みて感じることがありました。信頼関係が出来上がった上での指示と信頼関係が築かれていない内の指示に対して後者の指示は子ども達にとって、強ければ強い程反対に働いてしまいます。どれだけ思いをもって伝えているつもりでも意味がない、むしろ逆効果になってしまう為信頼関係を築いたうえでというのは重要な事なのだと再確認しました。それと同時に自分自身まだまだ子ども達の事を知れていないことが多く、信頼関係を築くことは簡単ではないなと改めて思いました。一人ひとりの性格やタイプを考え見極めその子に合った関わりを出来るよう努めたいと思っています。

本題の“発達の偏り”により配慮や支援を必要とする子ども達への理解と対応については、これまでも自身のなかで重要視していて、この先も考え学び続ける必要のある内容だと思っています。もちろん“保育”自体に答えもマニュアルもありませんが、障がい(特に名前のつかない障がい)がある子どもの生きづらさを全て取り除くことは難しく、そういった子どもに対する保育は特に試行錯誤をしながら行っているつもりです。また、私自身生きづらさを感じる経験をしているからこそ、子どもやその保護者に少しでもそういった思いを少なくしていける配慮や支援をしていきたいと思っています。そのためにも、現場でたくさんの子と接し、たくさんの先生の話を聞いて子ども一人ひとりに合った支援を知っていきたいと思っています。